

郷土博物館・文学館だより

第17回 渋谷現代短歌募集 優秀作・佳作発表

渋谷には、明治時代から現在に至るまで、多くの文学者が住み、近代短歌の発展に貢献してきた雑誌『明星』や『アララギ』も渋谷で発行されました。当館では、こうした渋谷の文学風土を継承し、区民をはじめ多くの方々に渋谷を再発見していただく機会として、年に一度、「渋谷」を題材にした短歌を募集しています。

17回目を迎えた平成28年度は、32名から132首が寄せられました。この中から優秀作5首、佳作5首が選ばれ、作品を書写した色紙は、当館に特別展示されました。また、5月10日には渋谷区役所仮庁舎にて表彰式が行われました。なお今回は、選者を短歌結社「まがたま」主宰の歌人、相沢光恵先生にお引き受けいただきました。

平成29年度は6月から短歌の実作を中心とした文学講座「短歌を詠もう」を開講しています。

今後も「短歌の街・渋谷」を目指し、様々な活動をしてゆきますので、ご期待ください。



表彰式に出席された入選者の皆さん

第十七回渋谷現代短歌く優秀作・佳作く
歌人 相沢光恵選

〔優秀作〕

渋谷駅を囲みしビル群は姿消し

カーンと青き空の広さよ (赤野 貞子)

カサカサと音聞きながら歩みおり

南平台に落葉の絨毯 (北村 早苗)

渋谷駅迂回迂回と案内図

迷路を抜けて見慣れたビルへ (功刀 國子)

ヒカリエの往く路来る路夕日影

急ぐ背の波地下に吸われて (黒川 京子)

区庁舎は取り壊されしも残りたる

丸時計はきざむ渋谷の未来 (宮下恵美子)

〔佳作〕

渋谷区に移り広尾で二十余年

福祉満喫健康卒寿 (飯田喜久三)

わが街を大神輿が行く鳳風の

眼居の先に金王神社 (糸井 修三)

行く人へイルミネーションきらきらが

似合う渋谷の華やぐ夜寒 (大庭 香江)

参道に張り出されたる書初を

読みつつ並ぶ代々木八幡宮 (金井 節子)

駅ビルの開業二〇一九年

五輪の前に完成なるや (神田美智子)

「代々木の地名の由来」といわれる大^{もみ}樅

現在渋谷区内で「代々木」の地名が付く場所は、区の中央北側に大きく広がり、区総面積の7分の1ほどもあります。具体的には、代々木1～5丁目・代々木神園町・元代々木町です。この渋谷を代表する地名の1つである「代々木」の地名が、1本の大木から付いたと言われることをご存じでしょうか。地名の由来には諸説あり、断定はできないものの、地名の由来となったといわれる木があったことは確かです。

その大木は、「代々木の大樅」といわれ、現在の明治神宮菖蒲園東門の近くにありました。江戸時代明治神宮周辺は、NHKで現在放送中の大河ドラマ「おんな城主 直虎」で知られ、のちに徳川家重臣となる井伊家の下屋敷がありました。そのため、幕末には大樅に登り、望遠鏡で品川沖の黒船の動向を監視したといわれています。

また、江戸時代「代々木の大樅」は、とても有名で、高さは数十尺（推定54m）、幹の周りは九抱（約14m余り）あったといわれています。

太い幹のため、木に馬3頭をつないでも、逆側からは体の一部も見えなかったといれ、日本一の大木だともいわれていました。大きく遠くからもよく見えたことから、旅人たちはこの木を目標に歩いたといえます。

さらに、この木の根の部分には水が常に湧き出ており、木を見物に来た人は神水として持ち帰り、薬として病人に与えたといえます。

しかし、昭和20年飛来したB29を高射砲で撃墜した際、運悪く大樅の上に機体が墜落し、焼夷弾を搭載していたためか、木は完全に焼け落ちてしまったといえます。

そのため、代々木の大樅の写真はほとんど残されておらず、実物を見た人もほとんどいません。しかし、昨年大正時代に撮影された大樅の写真が発見され、当館に寄付されたことから詳細に調べたところ、明治神宮の記念誌などに数枚写真が残されていることが分かりました。それらの写真は、いずれも当館寄付の写真ほど鮮明ではなく、撮影時期もはっきりとは分からない写真でした。

「代々木の大樅」は、明治期には枯れていたようですが、寄付写真は人物が写ることから木の大きさがよく分かり、その迫力が伝わってきます。木が失われてから70年以上たった今日、この写真は「代々木の大樅」の姿を伝える数少ない貴重な資料です。



代々木の大樅（大正11年12月5日撮影）

平岩弓枝と『御宿かわせみ』

平岩弓枝氏は昭和7年（1932）3月15日、渋谷区・代々木八幡宮の宮司であった平岩満雄氏の一人娘として生まれました。日本女子大学文学部国文科を卒業した翌年、昭和30年に小説家を志し、戸川幸夫に師事します。その後、戸川の推薦により長谷川伸が主宰する「新鷹会（しんようかい）」に入会し研鑽を重ね、昭和34年2月『大衆文芸』に発表した「鑿師（たがねし）」で第41回直木賞を受賞します。

昭和36年に長谷川門下の伊東昌輝氏と結婚した後、平岩氏はテレビドラマ・芝居の脚本・新聞小説・歴史小説・女性問題の評論と幅広い活動を続けます。昭和54年にNHK放送文化賞、平成3年（1991）に吉川英治文学賞、平成10年に菊池寛賞を受賞、平成16年には文化功労者に選ばれます。また平成9年に紫綬褒章、平成28年には文化勲章を受章しています。

平岩氏の作品では渋谷、とりわけ氏が生まれ育った代々木八幡宮近辺の風景を随所に発見できます。各作品に描写される光景を現在の渋谷と比較してみるのも一興かもしれません。

平岩氏の作品の中で、息の長い人気を得ているものが『御宿かわせみ』シリーズです。

『御宿かわせみ』は、江戸時代末期の大川端町（現在の東京都中央区新川近辺）に建つ旅籠「かわせみ」を舞台とした時代小説です。平岩氏は当シリーズの表現技法に「グランドホテル方式」を採用し、一つ所に集う多種多様な人間たちのドラマを捕物帖という形で描写します。

元同心の娘で「かわせみ」を切り盛りする女主人「るい」と、剣術・神道無念流の遣い手で、吟味方与力の弟でもある「神林東吾」。この二人の主人公と、彼らを取り巻く人々との繋がりを縦糸に、「かわせみ」に持ち込まれる様々な事件を横糸にして織りなされる人情捕物帖は、登場人物たちの温かい人間性が魅力になっています。作品の中には、現代の家庭でも起こり得る事件を扱ったものも多く、読者が「かわせみ」シリーズに心を寄せる理由の一つには、江戸に生きる登場人物の一人一人に、現在の自身が持つ一面を垣間みるところにあるのかもしれませんが。こうした人間ドラマとともに、江戸情緒あふれる風景描写が相まって、「かわせみ」シリーズは、累計1,000万部を突破するベストセラーとなっています。

本シリーズは映像化もされていますが、「るい」や「東吾」を誰が演じるのかも、読者には気になるところで、『御宿かわせみ読本』には、歴代の「るい」を演じた女優のインタビューが掲載されています。

当館は平成28年度に平岩氏より直筆原稿をはじめとする資料をご寄贈いただきました。

今後、平岩氏の展示も予定しております。

『御宿かわせみ』新装版
文春文庫
平成17年（2005）再版



文化財紹介

「滝坂道（たきさかみち）」

（平成29年3月9日 標柱設置）

所在地 円山町3番先



滝坂道は、徳川家康が江戸幕府を開き、江戸を中心としたいわゆる五街道を整備する以前から使われていた古道と思われる。

周知のとおり、天正十八年（一五九〇）七月に豊臣秀吉の小田原征伐によって、北条氏が滅ぼされ、家康が秀吉との相談の上、関東へ移封されます。その後、慶長五年（一六〇〇）九月、関ヶ原の戦いで勝利を収めた家康は、徳川氏の支配圏の拡大に伴い、当時の通信網である伝馬制度を整備するようになります。

次いで、同八年に征夷大將軍に任ぜられ、江戸に幕府を開くことになり、街道を順次整備してゆくののです。

大山道や甲州道中も古くからの道として存在していたと思われませんが、幕府によって道筋などが整備されました。

滝坂道は、大山道より分かれて調布の滝坂（現若葉町）にいたります。甲州出道とも呼ばれ、その分岐点は、道玄坂をのぼりきる手前の右側、交番のある場所です。ここが滝坂道の起点となり、円山町や神泉町を通じて、目黒区駒場から世田谷区太子堂や若林を経て、経堂・八幡山を抜けて、上祖師谷から調布市の若葉町で甲州道中と合流します。ちょうど現在の淡島通りに沿って東に向かう道筋と考えていただけると理解しやすいと思います。

現在滝坂道の渋谷区部分は、裏渋谷通りの愛称で親しまれています。

【今後の展示予定】

◆企画展「記憶のなかの渋谷」

平成29年8月12日（土）～10月15日（日）

◆特別展「渋谷駅の形成と大山街道」

平成29年10月28日（土）～平成30年1月21日（日）

◆企画展「道具のかたち—区内出土資料からみた道具のいろいろ—」

平成30年1月31日（火）～平成30年3月26日（日）

白根記念 渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 11:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※ 10名以上の団体料金

※ 60歳以上の方 障害のある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.35
平成29年8月10日発行